

「第24回総合リハビリテーション賞」贈呈式が2016年9月28日、医学書院本社にて行われた。

本賞は、『総合リハビリテーション』編集顧問の上田敏氏が東大を退官される折（1993年）に金原財団へご寄付いただいた基金を原資として発足したもので、「総合リハビリテーション」に掲載された1年間の全投稿論文のなかで最も優れた1編に贈られる賞である。

本年の受賞論文は、井上靖悟先生（東京湾岸リハビリテーション病院）他による「力学的エネルギー交換率の歩行効率指標としての妥当性—脳卒中片麻痺患者および健常者における検討」（43巻11号、2015）である。財団常務理事である金原社長より賞状・盾・賞金（10万円）が受賞者を代表して井上氏に贈呈された。

2015年の対象論文は29篇。この中から編集同人の推薦を経て、編集委員会による厳正な審査によって選出された。

受賞論文は、力学的エネルギー交換率（%R）が歩行効率の指標として妥当であるかどうかを検証することを目的に、生理的コスト指数（PCI）との併存的妥当性（基準関連妥当性）を検討したものである。対象は歩行が近位監視レベル以上の回復期脳卒中患者21名と健常高齢者15名。快適速度での10m歩行速度、その10m歩行中に腰部に取り付けた小型加速度計のデータからエネルギーの変化量を算出して求められた%R、および6分間歩行から得たPCIを測定。その結果、脳卒中患者においては、測定した3種の指標間それぞれに有意な相関を認めた。また、10m歩行速度を制御変数とした%RとPCIで有意な負の相関を認めた。一方、健常高齢者では3種の指標間に有意な相関はなく、%Rは脳卒中片麻痺患者の快適歩行において、歩行効率の指標として妥当と結論付けられた。

「今回の論文は、必ずしも新しい知見が得られたというわけではありません。しかし、非常にシンプルな仮説と実験方法、理解しやすい結果、そして現在の限界などがわかりやすく述べられている点が論文として評価された理由であると考えます。査読コメントに対しても誠実に回答されており、今後もさらに研究を深め、有効な利用方法をあらためて論文としてまとめていただきたい」と編集委員会を代表して高岡徹氏（横浜市総合リハビリテーションセンター）が講評された。

また、本年はあいにくご欠席であったが、編集顧問の上田氏からの「片麻痺患者のリハビリテーションにおいて、自立歩行の重要性は言うまでもなく、なかでもエネルギー効率の良い歩行が望ましいことも事実です。今回の皆様のご研究は、この点について重要な所見を加えたものと高く評価できるもの。



井上靖悟先生

今後ともさらに研究を深められ、できれば再度の受賞にもつながるような立派なお仕事をなされることを祈っています」との祝辞が紹介された。

受賞の井上氏は、まず日ごろから指導いただいている周囲の先生方や、編集委員による教育的な査読コメントに対しての感謝の気持ちを述べられ、また、自身が理学療法士として勤務されている東京湾岸リハビリテーション病院について、臨床と同様に研究にも力を入れている施設であると紹介されたうえで「その成果を患者さんへ還元するべく、今後も引き続き臨床と研究に努力を重ねていきたい」と今後の抱負を語られた。井上氏の言葉どおり、本誌には、毎年東京湾岸リハビリテーション病院からの投稿論文が多く寄せられている。これまで同じ施設からの受賞はまだないが、初の2度目の受賞を目指していただきたい。

本誌への投稿論文総数は、年間120～150篇程度で推移しているが、採用論文数は20～30数篇程度（採用率は15～20%）で、かなりの狭き門といえる。また、採用に至るまでには数度の修正を必要とする場合が多く、査読者とのやり取りの中で修正を断念してしまう論文もある。それだけに掲載された論文の質は高く、本賞の受賞後に活躍の幅をさらに広げている受賞者も多い。若手研究者にはぜひ受賞をめざしてチャレンジしていただきたい。

本誌ではリハビリテーションに携わるあらゆる職種からの論文を募集している。